悦目抄

上

1冊
2
28
27

悦目抄 上下

伝藤原基俊著、詠歌法、仮名書様
歌病、歌体、本歌取、仮名遣、古歌引用
上の梵不已心などを説く

竹西文庫

竹西文庫

支哥ハ後事ハ
一切の言葉ハ師匠ゆ
とをゆるのみ上ゆ
中うとをゆるし
ていの教ようを
いうとをゆるし
をとれ文徳ありゆ
ムをうけ師匠風情
をうけ
あうれ心ゆ
ゆ歌ハ人ゆ教ようち

しもりに五事せをふんふれとをてはてをあ
さんとをまんというさかりの下せいるをうとかるる
第一の秘しの迹をとんかんと思ひてしの義をうら
業をてをうのをうるのまんをろんらを秘んれ内を
りを西面天ををんをしりかり山野河海をを思ひ
めりをせいんりしら拾ひるを人をくを高ぬをくかるを
をかり慈給の人ををひをたを秀逸をわりたりを
なれ人をりをを奇いなのひ迹位をれいをめをを高ぬ秘
をりをを上をを見りのをおかりをりをりをを迹高をを
心りをを山道の秘んをこの道を長をん人いかりをに
ろりを下奇いいるりを人をんりををなを迹いわりんを

をりををふををはあを迹をれいをりをれをりをれなり
奇ををまんを思りを山道をりをを下をたをん
をを和万葉集をりりをめを三代集をみんをを
ゆりををを高をかをりををををを迹をををを下いをを
をれをををををりりをを和ををりををけをを
若面いありを迹万葉の和りをれををををりりんを
をりをりりを高りをりをりををををををりをを
らをりをりををいりを和いをりりをりをりを
一和ををををりりり

みゝ云ひもせず

上にうくいとにかくひ口合かくぬ

上にかくわとにうくい　上にかくれとにうくを

上にうくうとにかくふ　上にうくはとにへ

口合かくぬ　これくハをのうちやうりうくハ

いうくまもわれうるしうす

二　大うさかきたうてあしうくさうかの事

上にかくはうことにかくうあゝ上とを極くに書てとも也

上とをわくひくうくさにかとにかくうはとをわくに書てさは

上にかくはうを上とをわくに書てさへ上にうくうと上とを

をとうすかくうくうくとにうかとにわくひくうくさ

とにうくうたとをわくに書てさをとにうくうか

とをわくひ書てうくうつとをわくを

はしりとにかくうなとをわくに書てさへ上にうくうと

とにうくはうをとをわくぬふ上にうくうくとをとうぬてとに

くはうなとをわくぬあとにうくぬはとをわくぬさ

とをかくぬんとにうくぬみとをわくぬ結ー上にかく

うくうと上とをとうぬを

一奇とをつまひくこの故実秘事あり先奇と

よまん時の思案ー人丸赤人もんうりあはぬまは

秋ものとも云へ可うくうくはやうくはう

んをはしらせ、ひかりつまいをもて結ぶ道也
一哥とよまんよりは、その紙をたれうとうとうたんを結
付くるうんの字をとりめよ三なりは三百たるべし七
二あるいはめいくたひくりいかてこうたるべし七
一なりは一ゆうとうんとをもくいろんの
紙をあてをくべしうんをとりめけれとをとをと
つるゆへ歌本をくしけあをつるをこいつまり
えんの字といふは歌句をうんの紙といはるものなり
あるこゝはたらへは歌句といふをとをうるをもくれる
めもあるひとはくるれは治のをもをもるの歌たるね
うる也是はけんとをえうんの字をといふをうんの紙をこいふ歌

句をあるてたる事はれをりあるゆをうをへは神はは
をうをそまをうれをるいやうなるをこれをんはは
一哥いをへんあるすをうをけをそんあるを掃
うりうひをいりうをんあるゆくをりてをうをえをう
いはをわるを一をうをうをんをむをるをん
紙あひをるる事はをくいまれんををうへをつる
んあるをすいひるをいをうへをかをうをいを
うをきを清けをゆへをを哥ををりいある
しをををうををうををををりなををあるくを
ゆ哥紙をををを来をんをあるををををなん
をあるをるをを面対はををあるねををめをる

まきをとひきおろしてはかりしまつさの
よなんをろせいとしてよなかに三枝をそえて
まにさてくとあるこさはきうくはくはつ月そこと
あり月の山をしてろ海辺かとの道あるさうひな
こやうのこころをこと三句の間ををして下二句ニ句の
こをいひのこをさせかしてい三のれさをたけわるて
うめーいひまをうとこゆるのうかなこ
こめこをいひわるうーうは新ニ句を
せわるこをんはりはまにんはてよこはこあ
一句の武士の一首のうちよこめあるひうこをなく
いひしたるとい者祇園しうせかるゆへす

まるこをいたしてそうはまうのまはすくあ
まうあるへーこいてこうくやしくなまうこはひ
らうなはこをこをいるくをうひまうをこれ
うこをこれわるいなるむへうひをへてゆるくへはるる
組をあーはまをうわるーあうをめるく
まにこををみいそんこるへーを方をを
しをあるこをるれいをまうひをへて氣いあるて
うるとおりひうれたくへのあ海新くまりあるこをあひ
なくあんあるせむるーのやうとこのこをいそくる
はるりうーと思へるをなへてうをあるくねそあるる
をなくあんはをうをまうまるくるる要くるる古刊

日ゝ紀風古記風ゝ[illegible]
らとみるべし中ゝ[illegible]
のもすもらゝ中ゝ[illegible]
てみゝれとゝ歌の[illegible]
うゝはゝとゝいゝ[illegible]
肝心ゝらゝ世の[illegible]
のゝ[illegible]
用ゝゝ[illegible]
万葉集ゝゝ[illegible]
をみてゝ中ゝ[illegible]
ゝをもゝ

一句ゝゝ第一二句ゝゝ今の[illegible]第三四の句
ゝゝ第三四の句ゝ今ゝ第一二句ゝ
ゝ先達のゝ
ゝゝ[illegible]
ゝゝ[illegible]
ゝゝ[illegible]

てもとのこゝろにはんぬるとかれこれとをあらはす一句こゝ
ろあれといかにもおくみをうしなはすしてよろしくやかなるたは
いなくしてもつる所あるへしとみくをたゝくさけあよ
をうかゝいてかくんをうしなはすしてたゝ天よりの地のかれ
ものゝあるを日本紀の名所なくしてのみなへし
あるをなつかしみ所懐也風土記よりみてきとのれ
うり山川の名のあるをうかゝうてみくをうなるよりは
なをいかにかくはなきを所なるをいかにかくはなきを
こゝろ第あひうとあるをいかにかくはなきを
見ひろひとまてよるをやりうし風俗のうた
まろ美名をもとめりし楽府朗詠なとの中なれ

物のかなとの風情をのつからもとうんとをたき
をもへし

一歌をよくんはつてをやう歌ひ文字三字四字五字六字の歌も
あるをもとむへしとりしまへくこゝろうまくて
かをとをいふを文字にあらはしてよむへしのあるをく
くんはをもむしてをもへしをまつをもとむへしを文字を
をなをうたをわうしてなをうをよむ
なををまつてをのをうをよむをうくやのあ
と師匠をあらはしたれをうをとをもへしをの
こゝろをはつをあらはしたれをもむしてを
をたれをの歌をみをあるをもとむへしをを

いよいよ天命の儀植物雑物なども歌のまことにうるはしき
ものやうなん国をよまんものとうるはしきをとりて
ものわけ古意はいとうるはしきことにたくの昭山てそ
わまとうの国とあらはさて八芝源なる人しゆ楊と
いふ歌をそ歌ともあるうるはしくるもしく
ものうるはしくものとはいとうるはしくるもしく
なるものの歌よりは色ゆ宰歌よりは宰ぬなゆ面擔
の歌ぬなとあらはさるうるはしくるもしくおけまいるう
をしをよとうるはしくるもしくとりこはとうて
ものうるはしく歌令号解稀をとりうん歌よりさうて
歌まれなりあわるはいるもしくるはしくるはしく令ものうるはしく

目すくるかりうるをひうるはしくるはしくるはしく

[illegible]

一源宮なりといふ歌とえそぬしとあんしうとも
うあまことはけうてうとかさわけてなにとあうさ
まにたくへうこうんいわやうこうすくさく
恋歌懐の歌よりやうけたかうへ色よりあうさ
てうこうこれいかあしひとむへうこうのしにゆ
れとう絶いとへてんを海よりうぬ事なき色いろ別よ
ちうにはえうこうてうこうとあうはうあはむ

[illegible]

なりとえ文字といふよりそはおれりうめをのつうう歌よ
りうてありひわくてうこえ字よりやはんえ春夏秋冬
とあうん歌をえていい歌の字れまくるもうこを所の
家相をうくもうむへーかくのうこく先達ん前
うまうしあうあかうこ歌をえそうまんまい歌の
かれをうみまうへうんを歌のうりをうく世
一字にうこうへ但歌にうりてうこうこうを白
うぬ事もうこくうひをうこうへー
一立春といふん歌をそ家うら雪うり氷こうう代れ
うれ春のうーめれ家氣まそ歌のれれ物をみそぬ也
百首なりよまんまいかうこうの歌ん家れあんまい

立春と旦て去とのこゝろ
とゝ
てさとに
とい一句
ゆりゐ
めつ
こと
ゐて
めて
ゐて
たい
おり
ゐの

要之ゝ
哥の
風
和
光
哥
きる
一
一

となりぬ

一奇をとりあつめ上ぶくろのまんとうにいれうるに
あるべきもの中にうるまるべき奇もあるべきをそなへ
ものべく奇もあるべをとりあつめまんとす
また後白後取菓をとりあつめてこれをのの也えんの字
をそなへてもまゐけうんあをとりてみむよ海
ゆるくあらいいてうんあをとりてうしろにかく
和也秘しこの秘こそ奇をとりあつめ時いんを月に作あるをとり
して十方みりしあり山聖河海よりうしろ風
情をとりもしへしんをこそとりあつめ
いくらの也おかなるべき懐也

一奇をハ鼻舌頭をあつめ秘事極秘之
鼻をとりて口をもつへしへ色ハ
形の中をとりまんや時よりうるに時ハ山
奇ハ時のうしに口つのまたも形よむうに時ハうること
ある間思ひあり也りとめうるに人の和をと
あるとハ也情あるへしへ赤大事よあハせん
をいまうく那あるべ色ハ茅あるべうる外ハ口うり
外よ也べ或ことにあるべうを外ハ口をもて
をあるとにいゆうるべへうをや鼻をとりて口をもて秘こ
一奇の眞如を思うて面のよ害の和をかをと一首こそよ
もへしへ人九赤人の正口をゆつり給へしへ也

一紙をかくやうは一巻ものもの拍板をもてまし略をあて
もとり注をもりかなを添いろもとれ紙は何のかたく
あてら帯は二行七字は書りは三行四字は三首ま
なまれは二行七字は書也又七とも七とかく也年号は
おくは書とあれはわろしまたくへうしひかりは
一番の紙は下色はよりて古へ一帯は吾恵なまま
たとへは白髪のうつくしき色は帯のうつくしかりて頭こそ
うつくしきもしまりこそ作をは注を帯
又月雨はもろぬ拍本のなり拍ろく
をのわとわれ若はをり
この又月雨はもろぬはえんの字もとしろ書

あくこれうは拍を拍はもうのいろうくもありく
ひこれうは拍は命なりまりきてむいはめるに
ろひやいりこの又月雨のこれは結の紙はいかはよ
しそうむしてきて帥函教へ作り
又月雨はもろのたりの橋水こと家
沿ろうまをたりわりろ橋
はいこの又月雨はもんの字縄あひこて作者へ色るに
一帯は人はりてようこうへ一児とかとの字はあまりは
つくこと義はたりたのしれはいてそこへうる者
なるこ正新のしわりてなるこうこのしてもこに
わりし歳帯なるへし僧侶の字はむひこうもこ

をうこえんの字をんの組とをんうをいこうをを
えりいをうをんえたをの字をあーやをめ字を
んえうををなを海えん組のエトをせひえんををの
をひエトをんをくをりけをくをねを秀をのをし
うめるをわうーえんむひをうーすををいをうーめ
ゑセのひくをいむひゑセゑををセくのあひいうーををれわ
ひハすをを辺ひ三ホをえんの字ををを組ををもをを
ーたをんををんの字ををんれ組やいゑ

二行六　れーすををかのーをりを書なを辺
うあくをハえををををめをるをり後
ひえんれ字をむひあーすををはうををれ字を

をををえれうれをくをの字をのれ
一ゑえんの字ををうをはすをををををはをくをはすをを
ハすをををくをを字のをれゑ勝ををうはすをく胸をををは
ををををうをハ一ゑ字をををのを後をを辺ゑ後句
後句をめの句射句ををををてうをのをゑ字ををなを
えれをハをのをくをあをれ海をれをハあをををれ字の
ををを辺をんの組をのくれくをををひ海をいを
あを字ををあをををえれをををのををひををを海
をををなをををんををのををひをを勝をれをを字海
かをを字ををはすををを後ををれをを後ををを
一をハをんの字をををはをを後をかをくれ

とてうの也二に後白髭白に初とひきりて後をは
別なしとうの也一はえうの組をとりあすへきとして
なをしぬるかゝりくあきをへてうの也此奇物なをよは
ひあきをくいてこねなうへ一色をくくこと
まてへのうらをとろうたるをとりみつく奇
をもとむてこと色をとかあんに和奇れ道をおりひ
そまうへこと也くく色をとかぬこと
一かゆをいこうこと云はけをてたうを白の素をたし
やてこれ也けをてこ或うをとすへ一とは
ぬたれう色也白の素とは後白後白のおこりれる也
又いてこんこをんを白をみてれぬへくあるひ

はてこをはゆうたるをまくこもれなをてけてこと
をこはうをおううりこはけんに奥よはをとかこをと
おりてをくくゆ也
一かゆをえうこといはのり也のりにやてこうなる中れ
やうこうはうをの二をこうこのりをこうへ一
一奥名をとんはをこれをとはくこんをとあり
をはけあへくにをそのたををもこうあれ白
こうたをへにはをのりこをはくけくいてこをを
のりこのをすをも一をすてこうこのをなうこ
これをてこうはけんへ一奥にこうはへ一
一たををこををををこうをはいさとみとはとをも也名内

きゝあんなるこゝろもやまとことばなりとなりて
あめつちみときとはあめつちのあめとあめ月と
なるやいつくさとこゝろくをやまとことばなりとなりて
そゝはうとなるくうあめつちはやまとはいうかなり
こゝろこゝろこゝろこゝろたをたをきをかとはか
ぜくるあめつちわるしとこゝろぬんとうあめ
一やとあれかをといつかをんなをといつかをとこ
はくこゝろなるくやみ月のこゝろこゝろ
ゆくこゝろわれはあるかひつく
とあるこゝろねこれはとけるこゝろゆくこゝろなるひて
いきこゝろくやゆあはいるもしぬあるこゝろ

おもはるこゝろこゝろいひこゝろみこゝろきこゝろこゝろなる
やこゝろ一文字あきはめてやこゝろ
一こゝろをあまよこゝろこゝろのとは三十一字はこゝろこゝろ
今一字をとれこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ
をんなこゝろをこゝろこゝろあこゝろこゝろこゝろ
花の文字をたれこゝろみこゝろこゝろ
ねこゝろの枝こゝろこゝろこゝろこゝろ
こゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ
一こゝろをあはこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ
こゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ
こゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろこゝろ

[illegible]

一絹の上下をせられといふ心はせんに云ふことを後に云ふこれは
たゝ人の人間の月といふことを月は人をつゝひたちち
とのちくなと云ふことをよのうちをと云ふ月の出を
山れ月の月をと云ふは光はて事にんゝゝゝゝゝ
なを是は為の為ちうこと

一えんの字をとるのけたと云ふ家とあゝはゆゝてをく
ゝとかゝはゝもゝゝゝゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一うれしかるべき事をしるしてこうかとのそこさいてさうし
てさてさてさて亦数句嫁句の中間せたらんハ
ぬたれう　山字字也山雅あるなる
ぬ　あれさらをてらるあるへ浪ぬ
なんしうへかるハわれつきてん
あさゆふにむしのほたるぬるけまて
なにうと云ふみまてなるまぬ
た　住うしのあさ海をのかすかすつるる
こうぬすしたうつをこうんハしる旅し
こ拙の名まてもこうをいこんやあるなるん
ハわるし

ほうこうしたうこれ
ぬしたうまうぬ
たうのこうすみまて
のをあつうこ一和ねよ意れ
た　蕎山りあくほうこうしんなるは
うのおなまあり殺あこうせを
矢うあまをかこてあるる拙ほ場ほまを
れ　きうる雅あまて　やとの梅うも
たうふのくをのこてりさくれ
風こてくれいのちなるまけま
一ぬこうむへよ文字七字あるさこあそやこう北字是

一もよのやみも　これくも也　紙家云
くる岑　忠見ハ　ものに　ちり　と　まに　さ　うれハ　ふる
れとやうというの　ものとある　哥
夏のよをねぬよあをぬをひとう
人ハのをや　おもも　うきを
ぬれたりのなれよりせハ　ひろ　うを
人のとれたう　ぬ　ひ
一棟梁ハ　もみ字句のトよをうれハ　ふるいつく
て　紅をはくくやうもも
かく　歳ひ　ふくや　月のみ　ふる
ひろ　ぬれハ　あ　ふ　ひて
も

一廉秀ハ　よりと句のトよをさまハ　かるひよを
ふる　紅をはくくやうを
かをとうのくうひの　ぬ　いてみる
よ
今いくうあるぐわれ　ぬ　てん
ようよみてあてん人　あらの　花
ひまとれら　ぬ　ぬ　れ
一遍昭　素性うにのり　れ　ふ　ぬ　ぬ　ぬ
ひ　ぬ　れ　ぬ　ぬ　ぬ
梅　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
あ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
の
おもかるの月をそめてしまそこの

はるれハ人ハたゝひとなるこの
一中のこゝハやりと白の下よりあらハれて、かれゝに生
こゝなりとゝゝり
や　石海の行うゝにのまろわきるれや
みゝまるあゝを世ハなりよろる事
おりひそく西ゝ歌ゝぶハゝろうれ
あゝゝくまゝゝれと人ハゝゝゝや
一友刈ハみゝり白の下よりあゝて剱をゝれゝる所
やゝゝゝゝゝゝ
素のゝゝゝひゝこのゝ衣ゝゝをゝすゝ
み　山をゝりゝそみゝゝゝゝなゝ

仏ゝゝのまゝをあ歌ゝ物ゝくゝゝに
ゝゝゝゝゝれおゝゝゝゝしゝなゝ
一武口傳云人ゝ歌ゝくハむゝゝゝゝなゝ
いひゝゝ人ゝむゝゝあゝてゝゝゝゝゝゝゝ
ん　ゝゝ川ゝ紫ゝゝれてなゝゝゝゝ
わゝゝハゝゝ歌なゝやゝゝん
歌ゝゝゝゝゝゝ
おゝひゝゝゝゝれゝや人のみゝゝん
ゝゝとゝゝゝせハゝゝゝゝゝを
風ゝをハれゝゝ川ゝゝ信ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝん

紙はしの字ハ未だしきさてもうさ海さりて学ゆうて
古人ハ[illegible]れうとうやみうしめに書うたなとけ
の字とゆうハたうへハきみはもむしゆ[illegible]の
り也一三ハみうさうみ一三ハ月うハを月うを一三ハみう
めうんをうらめうしとうへてうむせ
一やをめ字うて二字ありわまうへうてはうを
川おうさ沈先恵かもすをうしうくうもうに
てうなうまたく今てうみうせハんうてすを
わひううううれうしううう先ホみうさ奇にう
うそうゆめくこのうをむへうしたう先恵の海しめせ
一安倍清行ゑ三日九和哥者先花後實不弥古語并

早陋こ不名字拙美名但花中水花殊中採殊
こ不美名不なこをむこをいうくくうれを哥思惟
せすへていうくくうこうひて花をいうくうひも美
初淑志賀の里紅葉ホ[illegible]ホ[illegible]ホ[illegible]田月ホハ更級伯母葉
清見ホ石廣深那波ハはそうめへ一先ホ
ホをんホホホへ一名哥ホ[illegible]ホ[illegible]
一云ホ沈ホ云ホうこ音ハうホ[illegible]ホ[illegible]
この理と云うんとせうこうとうて
ようこあをううまううあたうまなしたくなく
いううんうまうんうまゆあうなへしうれ奇にうり
ホれいうの翔海のホうを東氣のうハいううこ海のあう

[illegible]

[illegible]

[illegible]

月人　乱思　櫛蝶　渚鳴　花橘　老楓　十　純後悔　光也

一同心ハ初句ハ五字終ハ一字同也

あ風をあ〇今をあ　さにしるなる

みさとの川の数さえくなる

あさきをみさいとあれ　こころ也

一乱思ハ才一そ〜めの一才四句のそ〜めの一字同也

ま〜さいとれ〜ん　ん〜ん　ま〜

こゝひの月と君ゐみさ〜や

一櫛蝶ハ初の文字の終ハ一字才文句の終の一字同也

さそ〜ちこの〜さ後いさむ〜て

う〜ひ〜ま〜あ　ま　ま　ま

一渚鳴ハ第三句ハ終の一字終の七字終の一字同也

ほと〜ぎす　や　山　ま　ま　ハひ〜　を　ん

ま〜さ　さ　ふ　の　く　み　ま　ん

一花橘ハ名初の歌をかゝ　た　た　た　た　た　い　菊　と　歌　て

さくといちんと　ん　と　ん　と　ん　や　あ　ん　と　思　て　さ　く　う　に

なと後さくさくと　ち　ち　せ　ん　と　ち　る　也　月　を　歌　よ　え　て

ん　の　つ　そ　ま　て　後　て　月　と　ち　ち　せ　ん　と　ち　ま　ま　る　る　ま　也

一老楓ハ歌　と　ま　ま　や　さ　あ　る　ま　た　た　と　い　あ　紫　と　歌　て　小　金

ハ山の　ま　て　ま　ま　あ　ま　し　と　ひ　く　は　ま　花　を　歌　る　る　ま

美野山　ま　ま　あ　ま　ま　り　の　ま　と　り　て　な　た　て　て　た　て

一枝さけ　う　う　な　と　う　と　を　た　て　て　ま　ま　ま　ま

十三

一中絶ハ五りとゆくゑ五字毋なし七りとハも
しるべをいふ也
一後悔ハ心と翔る同しるゆかりさいひてハ今のく
もやうをあらはすなり後ハ悔うる也四病ハ病ぬけ
世ハ世ハ句のやまひとそ同しるの三なるひとる
也たとへハ蓋のつれなのの枕のとをもれ
字也是をこそ也又ぬすふの字とそうつたへハ
いとぬせぬなりひとをいとあるぬんのぬの字と
すの字とハ二本ふとくうつれも句とてそ
していとうるひてよとそのなとて二ものとうつ
也たとへハりてはなりんよ句とてもしかを

てとハ行こうつりあもハ和ハ也ハ
さうまはれんよりなるゆるて句とてそある
へうるひて古の字の病とそ句とてそ同りて
こうる也是もたれとあいゆうこなをれと
うはを云ハうひてとを也
こりさまたれうれ死ることをうけて
むりの人の神をうひる
世ハ也ハ同りあるとも世ハ也ハ行ハのれをう
なるありひのあるとハ同りくゆうこうる也
たうりもつるぬ同りこのをとふれ病とく也
也又同りりあるハ也りとう同

又宮ゐれば白とてそめぬをいとてもうすきのよそへ
白とそうすくれんれいすを煙ゐぬ紙の
今うんやいひ〜そうまたなる月の
あるをの月ゐまちいるれ
あの月と五月の月と同月あるとあり月を
月なるこの月也五月のまうく服あり月せん別
うを仲のり〜いうすうん
一京に紅の花そうんうをとなる物と紅の
二月にもくへぬと又初のあり武物を云ゆうれ京
初れ白ゆ〜ぬをいをくあるうを也ゆうくな
くうをめてうさ白あり〜えうんよのとく〜

いやうをなる武とうをいそうをいうをうをうを〜
京ハ初の白うにうくをゆうとあるをいうり
一又下ゆんうう又上ゆんうう七ゐ上ゆんうう七ゐ下
ゆんううゆくうをうをふしをあをまをまてハのまうよ
やあひのうかやくうくのいんういうをいなる
あれうの病をうれハ人よんうんをとうを〜又を
ホの病をゆうをゆ〜ゆうあるを〜いるうを京そ
ゆ〜大うを京れあうをうをうハいをゆうを〜
京にあまうれ京あるを〜